

原 著

北海道内の高校生におけるひきこもり親和性とその関連要因に関する検討

Consideration on *Hikikomori* affinity and related factors in high school students in Hokkaido

米田政葉¹⁾、志渡晃一¹⁾
Masaha YONETA¹⁾, Koichi SHIDO¹⁾

1) 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科

1) Graduate School of Nursing & Social Services, Health Sciences University of Hokkaido

抄録

ひきこもりの早期からの予防に向けた示唆を得ることを目的とし、2016年8月に北海道内の公立高校1校に所属する高校生951名を対象としひきこもり親和性とライフスタイル、抑うつ傾向、首尾一貫感覚(Sense of coherence:以下SOC)、過去の学校及び家庭での経験との関連について検討した。874名を分析対象として、親和性を目的変数、他の変数を説明変数とし、単変量解析としてFisherの直接確立検定、多変量解析としてロジスティック回帰分析を用い関連を検討した。親和群の該当率は全体で13.5%、男性12.2%、女性14.4%であり、性別に有意な差は見られなかった。ライフスタイルとの関連では、生活習慣が不良であり、抑うつ的であり、SOCが低かった。また、睡眠を中心とした生活リズムの乱れが見られた。過去の学校での経験については、友人・教員らとの関係に課題を抱えていた。一方、いじめとの関連については見られなかった。過去の家庭での経験の関連については家族に相談しても役に立たなかったと感じており、また、自分で決めて家族に相談することはなかった。さらに、両親の関係が良くなかった、我慢をすることが多かったとも感じていた。過去における親との関係について父母ともに共通していた要因は、過保護であったと感じている一方で、困ったとき親身に助言してもらったと感じていないこと、なんでも話すことができたと感じていないこと、学校の成績を重視していたと感じていることである。母親との関係についてのみ関連の見られた要因は母親から虐待を受けた、母親が過干渉であったと感じている点であり、父親との関係についてのみ関連の見られた要因は父親と自分との関係が良くなかったと感じている点である。

本研究の結果から、ライフスタイルについて良好に保てるよう支援すること、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーを活用し小・中学校での、学校及び家庭におけるストレスフルな経験について本人が受け止め対処できるとようにすると共に、必要な場合には関係調整に向けて諸機関が連携し適切な支援を行っていくことがひきこもり予防に繋がると考える。

Abstract

The purpose of this study is to obtain suggestions for prevention of *Hikikomori*. In August 2016, survey gusted wear distribute the target is 951 high school students belonging to one public high school in Hokkaido. The Auteurs examined the relationship between *Hikikomori* affinity and lifestyle, depression tendency, sense of coherence (SOC), past experience of school and home. The analysis target is 874 students. Objective variable was taken as affinity and the explanatory variable as other variables. Analysis method is Fisher's direct probability test and logistic regression analysis. The affinity group overall was 13.5% (male 12.2%, female 14.4%), and there was no significant difference in gender. Regarding lifestyle, lifestyle hobbit was disturbed ,depressed, SOC was low. In addition, sleeping pattern was disturbed. In the past, they had problems in relation with school friends and teachers. However, There was no relationship between bullying. They felt it was useless to consult with their families, and never consulted they family. In addition, parents' relationship was not good, and had a lot of patience.

The common factor that had in relation to parents in the past was that they were overprotective. Other outer had when in trouble they were feel that had advised parents. Furthermore, it was also related to not feeling that they was able to talk about anything, that they felt emphasis on the results of the school. The only factors that

were related to mothers' relationships are the fact that they were abused by their mothers, and that the mother felt that they were excessive interference. The only factor that seemed to be related only to the relationship with affinity-group father is that felt they relationship with they father was not good. From the results of this research, we believe it is important to support to maintain good lifestyle. Besides that, it is necessary to utilize school social workers and school counselors so that they can take and handle stressful experiences at schools and homes at elementary and junior high school. Furthermore, the outwards coordinating various institutions and providing appropriate assistance for the young people can prevent there becoming *Hikikomori*.

キーワード：ひきこもり親和性 高校生 ライフスタイル 過去の学校での経験 過去の家庭での経験

Keyword : Hikikomori Affinity, High - school student, Lifestyle, Experience-in-past-schools, Past-home-experience

I. 緒言

ひきこもりとは、様々な要因の結果として社会的参加を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念¹⁾と定義され、内閣府²⁾によると2016年時点で国内に約54万名程度存在するとされている。ひきこもりの特徴として男性に多く^{1) 3) 4) 5)}、長男に多く見られ⁴⁾、中流以上の家庭に多く見られること^{1) 4)}が指摘されている。ひきこもる主なきっかけは、いじめや不登校、就職活動の失敗、職場における挫折体験である^{5) 6)}。また、近藤ら⁷⁾は広汎性発達障害が原因となるケースも少なくない可能性を指摘している。さらに、ひきこもる理由が不明である群も一定程度存在する¹⁾。ひきこもりの初発年齢は二峰性がみられ、不登校の有無により初発年齢が分かれることが示唆されている⁶⁾。また、近年では長期化と高齢化が社会問題として注目されている。中垣内ら⁸⁾はひきこもりの長期影響について、ひきこもりが15年以上の長期にわたるケースでは、心身の機能低下のみならず、知的能力や社会スキルの低下が起る事を明らかにしている。KHJ親の会⁹⁾は長期化の防止と共に、ひきこもり好発年齢である中学校入学から20代前半の若者を対象とした予防の重要性を指摘している。

ひきこもり予防の視点から、ひきこもり親和群の存在が指摘されている。親和群とは、東京都の調査³⁾により初めて提唱されたものであり、東京都が独自に作成した親和性尺度により同定される。同調査では親和群について、ひきこもり群と似た心理的側面を有しながらも、ひきこもり状態にならずにとどまっている存在であるとしている。内閣府の調査¹⁰⁾における委員のコメントで、ひきこもり予備軍的存在である可能性が示唆されている。また、渡辺ら¹¹⁾は、親和群に対するケアについても充実化し、ひきこもりに至る前段階での介入方法を探索する必要性を指摘している。このことから、親和群について検討することがひきこも

り予防への一助となると考える。

親和群の特徴について、10代後半から20代前半の若年者に多く、また女性が多いこと、うつ状態や罪悪感を抱えていること、過去の友人との経験でいじめや不登校を経験している等、友人との関係があまりうまくいっていなかった。また、過去の家庭における経験で過去の経験において親から厳しい躰は受けているが、一方でコミュニケーションは希薄であったと感じていること、家族との情緒的な絆が弱いこと、日常生活において親から口出しされることや干渉されることを避けるにもかかわらず、重要なことを決める際には親や教師などのいうことに従わないと不安であるという両価的な態度を有していることなどが指摘されている^{3) 10)}。また、志渡ら及び米田らが北海道内の保健医療福祉系学生を対象に行った一連の研究^{12) 13) 14) 15) 16)}によるとライフスタイルが不良であり、抑うつ傾向が高く、首尾一貫感覚 (Sense of coherence : 以下SOC) が低いことが示されている。また、過去の学校での経験について、男性は友人関係に関する要因、女性は学生生活全般の影響が大きいことを指摘している。過去の家庭での経験について、男性では社会性に関する要因、女性では家族機能が不全傾向にあった可能性が示唆されている。予防的視点から見ると、より若い層についても検討することが、早い段階からのひきこもりの予防につながると考える。しかし、これまで大学生未満を対象とした研究は行われていない。そこで本研究では、早期からのひきこもり予防に向けた示唆を得ることを目的とし北海道内の高校生を対象に親和性とその関連要因について検討を行った。

II. 方法

1. 調査対象・期間・方法

北海道内の公立高校1校に所属する高校生951名を対象とし2016年8月に無記名自記式質問紙を用いた

集合調査を行った。回収数 913 名 (96.1%), 有効回答数 874 名 (90.9%) であり, 男性 353 名 (40.4%), 女性 514 名 (58.8%), 性別不明 7 名 (0.8%) であった。平均年齢は 16.4 ± 1.0 歳であった。

2. 調査項目

調査項目は 1) 基本属性 4 項目, 2) ひきこもり親和性 4 項目, 3) 日常生活習慣 11 項目, 4) 過去の学校での経験 9 項目, 5) 過去の家庭での経験 11 項目, 6) 過去の家庭での経験 10 項目, 7) 母親との関係 10 項目, 8) 父親との関係 10 項目, 9) The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (米国国立精神保健研究所疫学的抑うつ尺度; 以下 CES-D) 日本語版 20 項目, 10) SOC 日本語版 13 項目の計 69 項目とした。

3. 分類方法

ひきこもり親和性は 4 件法 4 項目で構成される尺度であり, すべての項目について得点を逆転処理したのち合計点を算出した。合計点数は 4 ~ 16 点に分布し, 先行研究にのっとり, 4 ~ 14 点を一般群, 15 ~ 16 点を親和群と定義した。

CES-D は, 4 件法 20 項目であり, うつ気分 (7 項目), 身体症状 (7 項目), 対人関係 (2 項目), ポジティブ項目 (4 項目) の 4 つの下位尺度から構成される。ポジティブ項目についてはすべて逆転処理を行った後, 他の 3 項目との合計得点を算出した。得点は 0 ~ 60 点までに分布し, 16 点未満に該当する群を「低うつ群」, 16 点以上に該当する群を「抑うつ群」と定義した。

SOC は 7 件法 13 項目から構成される尺度であり, 各項目に 1 点から 7 点を配点し既定の方法で合計点を算出した。合計点数は 13 ~ 91 点であり, 13 ~ 45 点を低値群, 46 ~ 59 点を中値群, 60 ~ 91 点を高値群

とした。

4. 分析方法

親和性を目的変数, 他の変数を説明変数とし, 単変量解析として Fisher の直接確立検定及び χ^2 検定, 多変量解析としてロジスティック回帰分析を行い関連を検討した。

5. 倫理的配慮

本研究は北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理委員会の承認を得て行った研究である (承認番号 16N033035)。対象が高校生であることから, 当該高校の学校長の同意を得て行った。また, 調査票の配布・回収は, 各クラスの担任に依頼した。配布時に 1) 結果の公表に当たり, 統計的に処理し個人を特定されることはない。2) 調査によって得られたデータは, 研究以外の目的で使用しない。3) 調査に参加しないことで不利益を被ることはなく, かつ途中での同意撤回を認めるという条件をについて口頭及び書面にて説明してもらい, 同意の得られたもののみを対象とした。なお, 収集後の調査票についてクラスごとに封筒に入れ集約したのち, 郵送にて回収した。

III. 結果

1. 親和群の分布

親和群は全体で 122 名 (14.0%) であった。性別に見ると, 男性 43 名 (12.2%), 女性 74 名 (14.4%) であり有意な差は見られなかった。また, 一般群は全体で 752 名 (86.0%), 性別では男性 310 名 (87.8%), 女性 440 名 (85.6%) であった。

2. 親和性と日常生活習慣・CES-D・SOC の関連

親和性と日常生活習慣・CES-D・SOC の関連について単変量解析の結果を表 1 に示した。一般群と比較し親和群で有意に該当率が高かった項目は, 深夜ま

表 1. ひきこもり親和性と生活習慣・CES-D・SOC の関連 (単変量解析) n(%)

	一般群	親和群	p
	751 (100)	122 (100)	
現在健康である	715 (95.2)	101 (83.5)	<0.01
1回30分以上の汗をかく運動を週2回以上、1年以上実施している	494 (65.9)	65 (53.3)	<0.01
朝、決まった時間に起きられる	620 (82.4)	82 (67.2)	<0.01
深夜まで起きていることが多い	491 (65.3)	98 (80.3)	<0.01
昼夜逆転の生活をしている	86 (11.5)	32 (26.2)	<0.01
平均睡眠時間(6~8時間)	338 (45.0)	39 (32.0)	<0.01
普段朝食を食べる	666 (88.7)	99 (81.1)	0.02
栄養バランスを考える	542 (72.3)	66 (54.1)	<0.01
悩みが人より多いと感じる	42 (5.6)	25 (20.8)	<0.01
趣味がある	723 (96.7)	110 (90.2)	<0.01
ダイエットをしている	202 (26.9)	38 (31.4)	0.30
CES-D高値群	324 (46.6)	96 (83.5)	<0.01
SOC高値群	223 (30.8)	8 (6.8)	<0.01

で起きていることが多い, 昼夜逆転の生活をしている, 悩みが人より多いと感じる, CES-D高値群の4項目であった. 一般群と比較し親和群で該当率が低かった項目は, 現在健康である, 1回30分以上の汗をかく運動を週2回以上1年以上実施している, 朝決まった時間に起きられる, 平均睡眠時間が6~8時間, 普段朝食を食べる, 栄養バランスを考える, 趣味がある, SOC高値群の8項目であった. 多変量解析の結果を表2に示した. 関連の独立性が見られた項目は, 現在健康である, 栄養バランスを考える, 悩みが人より多いと感じる, CES-D高値群, SOC高値群の5項目であった.

3. 親和性と過去の学校での経験

親和性と過去の学校での経験について単変量解析の結果を表3に示した. 一般群と比較し親和群で該当率が高かった項目は, 一人で遊んでいるほうが楽しかった, 不登校を経験した, 我慢をすることが多かった, 学校の勉強についていけなかった, 先生との関係が上手くいかなかったの5項目であった. 一般群と比較し親和群で該当率が低かった項目は見られなかった. 多変量解析の結果を表4に示した. 関連の独立性が見られた項目は, 一人で遊んでいるほうが楽しかった, 不登校を経験した, 我慢をすることが多かった, 先生との関係が上手くいかなかったの4項目であった.

4. 親和性と過去の家庭での経験の関連

表2. ひきこもり親和性と生活習慣・CES-D・SOCの関連(ロジスティック回帰分析)

	OR (95%CI)
現在健康である	2.05 (1.04-4.02)
1回30分以上の汗をかく運動を週2回以上、1年以上実施している	
朝、決まった時間に起きられる	
深夜まで起きていることが多い	
昼夜逆転の生活をしている	
平均睡眠時間(6~8時間)	
普段朝食を食べる	
栄養バランスを考える	1.87 (1.19-2.95)
悩みが人より多いと感じる	1.90 (1.00-3.58)
趣味がある	
ダイエットをしている	
CES-D高値群	2.80 (1.50-5.20)
SOC高値群	0.43 (0.29-0.64)

二項ロジスティックモデル(ステップワイズ法), 性別, 年齢で調整.

※一般群を1, 親和群を2とした. P<0.05で有意だった項目のみ数値を記載

表3. ひきこもり親和性と過去の学校での経験(単変量解析)

	n(%)		p
	一般群	親和群	
友達とよく話した	730 (97.1)	122 (100)	0.49
親友がいた	661 (87.9)	102 (83.6)	0.19
一人で遊んでいるほうが楽しかった	157 (20.9)	54 (44.3)	<0.01
不登校を経験した	12 (1.6)	10 (8.2)	<0.01
友達をいじめた	31 (4.1)	9 (7.4)	0.11
友達にいじめられた	58 (7.7)	12 (9.8)	0.42
いじめを見て見ぬふりをした	70 (9.3)	18 (14.8)	0.06
我慢をすることが多かった	218 (29.0)	71 (58.2)	<0.01
学校の勉強についていけなかった	236 (31.4)	56 (45.9)	<0.01
先生との関係がうまくいかなかった	105 (14.0)	39 (32.0)	<0.01

表4. ひきこもり親和性と過去の学校での経験(ロジスティック回帰分析)

	OR (95%CI)
友達とよく話した	
親友がいた	
一人で遊んでいるほうが楽しかった	1.94 (1.23-3.04)
不登校を経験した	3.01 (1.19-7.61)
友達をいじめた	
友達にいじめられた	
いじめを見て見ぬふりをした	
我慢をすることが多かった	2.50 (1.60-3.91)
学校の勉強についていけなかった	
先生との関係がうまくいかなかった	1.81 (1.12-2.94)

二項ロジスティックモデル(ステップワイズ法), 性別, 年齢で調整.

※一般群を1, 親和群を2とした. P<0.05で有意だった項目のみ数値を記載

親和性と過去の家庭での経験の関連について単変量解析の結果を表5に示した。一般群と比較し親和群で該当率が高かった項目は、自分で決めて家族に相談することはなかった、家族に相談しても役に立たなかった、両親の関係が悪くなかった、我慢をすることが多かったの4項目であった。一般群と比較し親和群で該当率が低かった項目は見られなかった。

多変量解析の結果を表6に示した。関連の独立性が見られた項目は、自分で決めて家族に相談することはなかった、我慢をすることが多かったの2項目であった。

5. 親和性と過去における母親との関係の関連

親和性と母親との関係の関連について単変量解析の結果を表7に示した。一般群と比較し親和群で該当率が高かった項目は、母親は学校の成績を重視していた、母親から虐待を受けた、母親が過保護であった、母親が過干渉であったの4項目であった。一般群と比較し親和群で該当率が低かった項目は、母親とは何でも話すことができた、困ったとき母親は親身に助言をしてくれたの2項目であった。多変量解析の結果を表8に示した。関連の独立性が見られた項目は、母親とは何でも話すことができた、母親が過保護であった、母親が過干渉であったの3項目であった。

6. 親和性と過去における父親との関係の関連

表5. ひきこもり親和性と過去の家庭での経験の関連(単変量解析) n(%)

	一般群	親和群	p
	741 (100)	122 (100)	
自分で決めて家族に相談する事はなかった	99 (13.2)	35 (28.7)	<0.01
家族に相談しても役に立たなかった	126 (16.8)	37 (30.3)	<0.01
小さい頃から習い事に参加していた	557 (74.3)	84 (68.9)	0.21
両親の関係が悪くなかった	77 (10.3)	22 (18.0)	0.01
引越しや転校をした	240 (32.0)	47 (38.5)	0.15
大きな病気をした	37 (4.9)	7 (5.7)	0.71
両親が離婚した	77 (10.3)	15 (12.3)	0.50
経済的に苦しい生活を送った	34 (4.5)	9 (7.4)	0.18
我慢をすることが多かった	107 (14.2)	44 (36.1)	<0.01

表6. ひきこもり親和性と過去の家庭での経験の関連(ロジスティック回帰分析)

	OR (95%CI)
自分で決めて家族に相談する事はなかった	2.32 (1.44-3.73)
家族に相談しても役に立たなかった	
小さい頃から習い事に参加していた	
両親の関係が悪くなかった	
引越しや転校をした	
大きな病気をした	
両親が離婚した	
経済的に苦しい生活を送った	
我慢をすることが多かった	3.18 (2.04-4.95)

二項ロジスティックモデル(ステップワイズ法), 性別, 年齢で調整。
 ※一般群を1, 親和群を2とした。P<0.05で有意だった項目のみ数値を記載

表7. ひきこもり親和性と母親との関係の関連(単変量解析) n(%)

	一般群	親和群	p
	752 (100)	122 (100)	
母親とは何でも話すことができた	389 (51.7)	49 (40.2)	0.02
母親はしつけが厳しかった	57 (7.6)	15 (12.3)	0.08
困った時母親は身に助言してくれた	398 (52.9)	50 (41.0)	0.01
将来の職業などを母親に決められた	8 (1.1)	4 (3.3)	0.05
母親と自分との関係が悪くなかった	62 (8.2)	16 (13.1)	0.08
母親は学校の成績を重視していた	130 (17.3)	33 (27.0)	0.01
母親と死別した	3 (0.4)	0 (0.0)	0.50
母親から虐待を受けた	2 (0.3)	2 (1.6)	0.04
母親が過保護であった	46 (6.1)	19 (15.6)	<0.01
母親が過干渉であった	17 (2.3)	16 (13.1)	<0.01

表8. ひきこもり親和性と母親との関係の関連(ロジスティック回帰分析)

	OR (95%CI)
母親とは何でも話すことができた	0.64 (0.42-0.98)
母親はしつけが厳しかった	
困った時母親は身に助言してくれた	
将来の職業などを母親に決められた	
母親と自分との関係がよくなかった	
母親は学校の成績を重視していた	
母親と死別した	
母親から虐待を受けた	
母親が過保護であった	2.17 (1.17-4.06)
母親が過干渉であった	5.30 (2.51-11.22)

二項ロジスティックモデル(ステップワイズ法), 性別, 年齢で調整.

※一般群を1, 親和群を2とした. P<0.05で有意だった項目のみ数値を記載

親和性と父親との関係の関連について単変量解析の結果を表9に示した. 一般群と比較し親和群で該当率が高かった項目は, 父親と自分との関係がよくなかった, 父親は学校の成績を重視していた, 父親が過保護であったの3項目であった. 一般群と比較し親和群で該当率が低かった項目は, 父親とは何でも話すことが

できた, 困ったとき父親は親身に助言してくれたの2項目であった. 多変量解析の結果を表10に示した. 関連の独立性が見られた項目は, 父親とは何でも話すことができた, 父親は学校の成績を重視していた, 父親が過保護であったの3項目であった.

IV. 考察

表9. ひきこもり親和性と父親との関係の関連(単変量解析)

	n(%)		p
	一般群	親和群	
父親とは何でも話すことができた	742 (100)	122 (100)	0.01
父親はしつけが厳しかった	236 (31.4)	23 (18.9)	0.06
困った時父親は親身に助言してくれた	50 (6.6)	14 (11.5)	0.01
父親と自分との関係がよくなかった	275 (36.6)	30 (24.6)	0.02
将来の職業などを父親に決められた	39 (5.2)	13 (10.7)	0.80
父親は学校の成績を重視していた	8 (1.1)	1 (0.8)	<0.01
父親と死別した	68 (9.0)	26 (21.3)	0.88
父親から虐待を受けた	11 (1.5)	2 (1.6)	0.33
父親が過保護であった	2 (0.3)	1 (0.8)	<0.01
父親が過干渉であった	20 (2.7)	10 (8.2)	0.09

表10. ひきこもり親和性と父親との関係の関連(ロジスティック回帰分析)

	OR (95%CI)
父親とは何でも話すことができた	0.52 (0.32-0.86)
父親はしつけが厳しかった	
困った時父親は親身に助言してくれた	
父親と自分との関係がよくなかった	
将来の職業などを父親に決められた	
父親は学校の成績を重視していた	
父親と死別した	
父親から虐待を受けた	
父親が過保護であった	2.86 (1.25-6.53)
父親が過干渉であった	2.38 (1.40-4.04)

二項ロジスティックモデル(ステップワイズ法), 性別, 年齢で調整.

※一般群を1, 親和群を2とした. P<0.05で有意だった項目のみ数値を記載

本研究の結果, 親和群の該当率は全体で13.5%, 男性12.2%, 女性14.4%であり, 性別に有意な差は見られなかった. これは, 内閣府の調査を二次解析した結果¹⁷⁾における15~19歳の群よりも高い該当率であった. また, 志渡ら及び米田らが大学生を対象として行ってきた一連の研究^{12) 13) 14) 15) 16)}では該当率は14

~18%であり, これと同様の結果であった. このことから, 大学生のみならず, 高校生段階においても一定程度親和性の高い群がいる可能性が示唆されたと考える.

また, 性別での該当率について着目すると, 東京都³⁾及び内閣府¹⁰⁾では, 女性に親和群が多いことが指摘

されているが、本研究では、大学生を対象とした先行研究と同様に性別との関連は見られなかった。そのため、今後、職種なども加味してさらに性別との関連について検討する必要があると考える。

親和群の生活習慣等の特徴は、主観的健康観が低く、抑うつ的であり、SOCが低い。また、深夜まで起きていることが多く、昼夜逆転傾向にあり、朝決まった時間に起きられず、平均睡眠時間が不良である。さらに、普段朝食を食べておらず、栄養バランスについても考えていないこと、趣味がないこと、人より悩みが多いと感じている点である。この結果は米田ら¹⁶⁾が大学生を対象に行った研究をおおむね支持する結果であった。一方で、同研究¹⁶⁾では関連の見られていない睡眠を中心とした生活リズムの影響との関連が見られた。森らはひきこもりの特徴として、小・中学校段階における睡眠や食生活など生活リズムが乱れていることを指摘している。本研究の結果から、高校生段階においても同様のことが言える可能性が示唆されたのではないかと考える。

過去の学校での経験について親和群は総じて、一人で遊んでいる方が楽しかったと感じており、不登校を経験していた。また、我慢をすることが多かったと感じていたほか、学校の勉強についていけなかった、学校の先生との関係が上手くいかなかったとも感じていた。これらの結果はおおむね先行研究と同様の結果であったが、いじめとの関連が見られなかった点が異なっていた。手代木¹⁸⁾はいじめによる心的外傷からの回復について、想像以上の長い時間と当事者の苦痛の中での努力が必要であると指摘している。このことから、回答者の中に、小中学校においていじめの被害・加害経験などがあるが、回復しきっていない為、いじめ経験の有無について回答できない群が一定程度いた可能性があると考えられる。

過去の家庭での経験の関連について親和群は家族に相談しても役に立たなかったと感じており、また、自分で決めて家族に相談することはなかった。さらに、両親の関係が良くなかった、我慢をすることが多かったとも感じていた。これらの結果は一連の先行研究^{11) 12) 13) 14) 15) 16)}を支持する結果であったと考える。

過去における親との関係について父親・母親ともに共通していた要因は、過保護であったと感じている一方で、困ったとき親身に助言してもらったと感じていない点、なんでも話すことができたと感じていない点、学校の成績を重視していたと感じている点である。

母親との関係についてのみ関連の見られた要因は母親から虐待を受けた、母親が過干渉であったと感じている点であり、父親との関係についてのみ関連の見られた要因は父親と自分との関係が良くなかったと感じている点である。これについて米田¹⁶⁾らが北海道の大学生を対象に行った研究と比較すると、おおむね一致していた。

本研究の結果から、保健教育において、睡眠を中心としたライフスタイルの保持増進に関する教育を十分に行うとともに、これらについて良好に保てるよう支援することが重要であると考えられる。また、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーによる心理的支援を活用し、小・中学校の段階における、学校及び家庭におけるストレスフルな経験について本人が受け止め対処できるとように支援していくと共に、必要に応じて学校をはじめとする諸機関が連携して関係調整に向けた支援を行っていくことがひきこもり予防に繋がると考える。

本研究の有効性は、これまで行われていなかった北海道内の高校生における、親和性とその関連要因について検討しひきこもり予防に向けた有用な示唆を得た点である。今後、調査対象を複数の高校に拡大すること、調査票を改善し、各段階ごとのどのような経験が親和性に影響するのかについて検討する事が課題である。

V. 謝辞

本研究を実施するに当たり調査にご協力くださった武内達也先生、原田浩明先生をはじめとする諸先生、生徒の皆様、北海道医療大学看護福祉学部 奥田かおり先生に心より感謝いたします。

文献

- 1) 厚生労働省. ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン. [online] [2011年4月1日検索] < URL : <http://www.zmhw.c.jp/pdf/report/guidebook.pdf> >
- 2) 内閣府. 若者の生活に関する調査報告書. [2016, 12月31日検索] < URL : <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf-index.html> >
- 3) 東京都. 実態調査から見る若者のこころ. [2009年4月1日検索] < URL : http://www.seisyounen-chian.metro.tokyo.jp/seisyounen/pdf/seisyounen/pdf/14_jyakunen/

- jittaihoukokusyo. pdf >.
- 4) 斎藤環. 社会的ひきこもり: 終わらない思春期, PHP 新書、1998、東京、25-52.
 - 5) 土岐茂、谷山純子、衣笠隆幸. 精神保健福祉センターを受診した「ひきこもり」の実態調査. 精神医学. 2011; 54 (4); 339-346
 - 6) 高畑隆. 埼玉県における「ひきこもり」の実態. 精神医学. 2003; 45 (3)、299-302.
 - 7) 近藤直司、小林真理子、有泉加奈絵、他. 思春期・青年期における不登校・ひきこもりと発達障害. 精神保健研究. 2004; 17; 17-24
 - 8) 中垣内正和、小松志保子、猪爪和枝、他. 長期ひきこもりにおける心身機能の変化について. アディクションと家族. 2010; 26 (3); 207-216
 - 9) 特定非営利活動法人全国引きこもり KHJ 親の会 (家族会連合会). ひきこもりの実態およびピアサポーター養成・派遣に関するアンケート調査報告書. [online][2015年8月1日検索] < URL : <http://www.khj-h.com/pdf/14houkokusho.pdf> >
 - 10) 内閣府. 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査). [online][2010年12月25日検索] < URL : http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_index.html >
 - 11) 渡部麻美、松井豊、高塚 雄介. ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討. 心理学研究. 2010; 81 (5); 478-484
 - 12) 志渡晃一、上原尚紘、佐藤巖光、他. 高等教育機関に所属する学生のひきこもり親和性と抑うつ症状、SOC の関連. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 2013; 9 (1); 121-124
 - 13) 米田政葉、志渡晃一. ひきこもり親和性に関する検討. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 2015; 11 (1); 43-47
 - 14) 米田政葉. 高等教育機関に所属する学生のひきこもり予防. 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科修士論文. 2016
 - 15) 米田政葉、志渡晃一. 保健医療福祉系学生におけるひきこもり親和性とライフスタイル、CES - D、SOC に関する性別での検討. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 2016; 12 (1); 49-52
 - 16) 米田政葉、奥田かおり、志渡晃一. 北海道内の高等教育機関に所属する新入学生のひきこもり親和性とその関連要因の検討. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 2017; 13 (1); 3-8
 - 17) 志渡晃一、米田政葉. ひきこもり及びひきこもり親和性の性・年齢階級別分布: 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査) の二次分析. 北海道医療大学看護福祉学部紀要. 2015; 22; 13-18
 - 18) 手代木理子. いじめられ体験の反応と回復過程. 小児保健研究. 2008; 68 (2); 209-211